

## 第1回流山市まち・ひと・しごと創生会議議事概要

### 1. 日時

平成27年5月26日（火） 13時から15時まで

### 2. 場所

流山市役所305会議室

### 3. 参加者

浅川 陽子 江戸川大学 教授  
池森 政治 流山商工会議所 会頭 代理：上坂 操 専務理事  
大野 トシ子 流山市民生委員児童委員協議会 会長  
小林 暁峯 流山市生涯学習審議会 会長  
田根 洋 流山市小学校校長会 会長  
成島 崇 株式会社千葉銀行 流山支店長  
布施 高広 千葉県東葛飾地域振興事務所 所長  
山田 聡 流山市総合政策部 部長 議長  
宮島 芳行 流山市健康福祉部 部長 代理：小西 和典 障害者支援課長  
矢野 和彦 流山市子ども家庭部 部長  
福留 克志 流山市産業振興部 部長  
(事務局)  
企画政策課

### 4. 資料

資料1 まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」「総合戦略」パンフレット  
資料2 流山市総合計画後期基本計画（概要版）  
資料3 地方版総合戦略策定の考え方  
資料4 地方版総合戦略策定のスケジュール  
資料5 下期実施計画における人口見通しについて  
資料6 平成27年度流山市主要事業（地方創生追記）  
資料7 人口推計の比較

### 5. 委員からの意見

(委員)

- ・多様な保育事業の質的保証を目指してはどうか。今回の「子ども・子育て支援新制度」により、地域型保育給付、小規模保育、家庭的保育事業等への給付や地域子ども・子育て支援事業が創設された。その中で家庭的保育に注目している。欧米ではベビーシッターなどからのボトムアップ的に生まれたものであるが、日本では1950、60年代に京都府で指定された「昼間里親制度」が始まりで、その後東京や横浜に広がっていった。小さな環境で家庭的な保育を行う、特に乳児は、施設に行

かないで、ちょっと助けてもらうような家庭的な保育、そしてそれにサポートできる人材に公的支援が求められている。

- ・また、今回の新制度により事業所内保育なども支援の対象となったので、そこで働く保育士の研修など、質の充実、それをいかに担保できるかが重要である。
- ・次に、ケアと教育のよりより統合をめざす。イギリスの保育政策に良い言葉があった、「Every Child Matters (どの子ども大切に)」。どの子どもにも最良の保育環境を用意するために保健や警察とも連携を図っている。
- ・流山市は30代、40代の働き世代が増えており、今後長時間保育の一般化が進んでいくと思われる。保護者は託児ニーズから、より質の良い子育てのニーズに変わってくるだろう。そしてそれらを支える物心の支援が必要になってくる。例えば、赤ちゃんに本をプレゼントする「ブックスタート」や深夜や休日に子どもの急病に対応できる電話相談「子ども急病迷わず#8000」なども流山市として検討されてはいかがか。
- ・最後に、地域を基盤とした子育て支援の要素を明らかにする、として6つご提案する。現状(ニーズ)の調査と明確化、本人(母親父親、保護者)の育児力・生活力の醸成、本人のサポート体制づくり、当事者の活動と地域参画、地域住民による支援活動の創出、ネットワークの形成と情報提供。今回の新制度は、個人を支援するとともに、地域で個人を支援する、人と人とのつながりを活性化することで母親の孤立を副防ぐという目論見もある。先日、保育園のお母さんから聞いた話によると、子どもに泥遊びをさせたいと市に相談したら、民生委員や公園の管理している部署等が連携した結果、泥んこ遊びができるようになったという話を聞いたが、これこそがまさに地域による支援活動かと思う。
- ・また、子育てに関するホームページの説明が難しいという声がある。やわらかい表現に変更してもらえると、子育てに疲れているお母さんにも伝わりやすいと思う。

(委員)

- ・中小企業の立場からお話しさせていただく。第一次ベビーブームで東京の郊外に移り住んできた世代(団塊の世代)が高齢化してきている。また、市内には大型店も7、8店舗進出している。そのような状況下で商工会議所としても、商店の魅力づくり、創業支援、まちゼミ、一店逸品運動、産業博などの施策を実施している。
- ・しかしながら、法人化の商店街は1つのみで残りは任意の商店街であり、それら多くに空き店舗が存在する。市の方でも空き店舗対策の補助金があるが、中々それにたどりついていない状況である。母になるなら流山に倣い、商売するなら流山ということで、昨年度から創業スクールを実施しているところである。

(委員)

- ・民生委員の立場から述べさせていただく。民生委員の活動が大きく変わったのは、介護保険法の施行後、それまで高齢者のお世話という活動が主だったものが、自宅で元気に過ごす高齢者がそのまま暮らしていけるようにする支援、そして、子育てを支援するという大きな2つの活動に変わった。そのような活動の中で、空き家住宅をよく目にする事から、その対策の必要性を感じる。君津市では、空き家に若い人に住んでもらうような施策を実施している。空き家の活用により住宅が高く

て購入できないといった問題の解消にもつながるのではないか。

- ・今、一番関心のあることは、子育て政策である。フィンランドで取り組んでいる「ネウボラ」という子育ての地域拠点がある。妊娠から出産、そして就学まで切れ目のない支援をする、ワンストップ保健師さん、これについてもようやく政府が取り組み始めたところである。千葉県では浦安市で「日本版ネウボラ」に取り組んでいる。また、財源として、国の平成26年度補正予算で「地域少子化対策強化交付金」が30億円付けている。
- ・ネウボラまでいかなくとも、子育て施策にシニア世代の活力を生かせないか。シニア世代の意識改革により、シニア世代に子育てをお手伝いいただくことも一考かと思う。
- ・今、民生委員としては、市民の皆さんがお友達になっていただく、そのためにはまずは挨拶からと挨拶運動を行っている。みなさんが顔見知りになれば、高齢者や児童の虐待も減ってくると思う。
- ・最後になるが、若い世代が流山市に住んでみようという気持ち、住宅が高くて買えない方には空き家の活用や、また、企業誘致により職住接近、若者向けの雇用の充実、さらには、子育て世代が2人目、3人目と育てたくなるような居場所ができればいいのかと思う。

(委員)

- ・流山市は大都市圏に属し、ベッドタウンである。欧米流に言えば、コミュニティータウンである。そうであれば、ベッドタウンとしてマネーフローを良くしていく。流山市の税収は多くは勤労者からのものが多いと思われるから、流山市が発展していくためには、働く人が増えることが最良ではないか考える。観念的な考え方になるが、子育て世代やシニア世代よりも、考える中心は、働きたい人が安心して働けるといところから、その問題点を解決していけば良いのではないか。
- ・先ほどから話が出ているが、働くお母さんたちが一番困るのはエマージェンシー（緊急事態）である。普段は学童や保育園があるが、子どもが病気になったときに働けなくなる。私の資料にもあるが、子どもにしても高齢者にしても、社会的弱者を支えている就労可能人口が積極的に社会参加できるという視点で個々の問題を作ったらいいのではないか。
- ・流山市子ども・子育て支援総合計画に6つの基本目標があるが、その中でも一番気に入っているのが、「男女がともに仕事と子育てを両立できる環境づくり」である。要するに、働ける人が働けるようにすることが、流山市にとって当面はいいのではないかと思っている。

(委員)

- ・私からは県の状況や東葛地域の状況についてお話しする。県としては、人口ビジョンと総合戦略の骨子案についてはできているが、決裁中であるためこの場ではお示しできない。基本的な柱については、雇用の場の確保、魅力アップ、結婚・出産・子育ての支援、安心安全なまちづくり、また、大きなものとしてオリンピックを契機に知名度、魅力アップを図りの人の流れを作りたいと考えている。
- ・人口ビジョンについては、県の人口はピーク時620万人いたが、30年後には5

40万人になると推計している。東葛地域については、自然増も社会増もしていくとみており、人口減少という点ではこの地区は心配ないのかなと考えている。

- ・近隣市の状況については、策定は10月末のところもあるが、多くは年末、若しくは年度末までの策定を予定している。策定手法については、各市委託により策定する予定である。
- ・各市の取組みについては、まずは社会増を増やしていくとともに、流入した人口をいかに定住してもらうか。そして、その地域で子どもを産んで育てたいといかに思ってもらうか、というような課題を解決するための施策を考えているようである。
- ・個人的には、この地区については、社会増は心配ないのではないのかと、東京に近接しており雇用の場も確保されている。心配なのは、将来的に人口をいかに維持していくか、次の世代、今の30代、40代の子どもにいかに住んでもらえるかというサイクルをつくる必要があると考えている。
- ・それから、県では、10代、20代の結婚や出産、子育てに関する意識調査を行う予定である、そういう取組みも必要ではないかと考える。

(委員)

- ・全体的な絵の描き方であるが、流山市は人口増加をしており、市もそれに合わせて保育事業などの施策を打ってきている。そこで、人口増加を切り口にしてみてはどうか。そこから次の施策を打っていくという見せ方が重要ではないか。第2段階として、保育事業の次、例えば教育事業などを今回の戦略の中で考えていけば良いのではないか。教育の質、保育の質を担保することは非常に難しいことであるが。先日も流山有料道路は無料になったが、見せ方として、インター周辺に企業立地を進めるために無料化しましたなどもありかと思う。
- ・おおたかの森以外の地域では、例えば平和台などは高齢化が進んで空き家も増えていたり、耕作放棄地も増えていたりしている。その利活用ということも次の段階で考えていくことではないかと思う。
- ・流山市は大きなメリットがあるのでそこを有効に展開していく。創業支援など、人口増加、そしてマーケットに魅力があるので、外からいろんな人（企業）が入ってきており、競争も激しい。その中で生き残っていくということは非常に大変なことなので、その中で今までとは違う新たな産業を支援していくということも必要である。
- ・日本全体で考えると、これだけ人口が減ってくると税収も減るので、外からお金が入ってくる仕組みを作らなければならない。市にもそれは当てはまり、人口が増加し、人が集まり、いかにそこでお金が落ちるかということも一つあるのかと思う。
- ・銀行としても、地方創生を支援するパッケージを作っており、グループ会社としてマーケティングや調査を行う会社もあるので、有効に活用できる場面もあろうかと思う。
- ・最後になるが、流山市としては人口増加の強みを生かした戦略がわかりやすい。流山市のこれまでの政策は非常にわかりやすく、他からの認知度も高い。他の自治体ではどうしても総花的なものが多い中で、流山市のコンセプトは明確なので、それを次の段階に進めていくことが必要と考える。

(委員)

- ・教育の観点からお話しする。他からの人口流入という意味では、教育現場としても考えやすい。施設面を充実されることや、流山市の学校なら安心安全という流れにするとか、人的にもサポート教員や支援員を充実される、そういうことは可能かと思う。これは入ってくる人口であって、流山市の学校は充実しているから、2人目、3人目とはならないだろうから、そこで増やすということは学校現場としては難しいと思う。そこには経済的な問題や支援の充実などが解決されて初めて人口が増加するのではないか。
- ・学校現場でもかつて児童・生徒数が増えて、毎年1校に5、6人の新規採用の先生が入ってきた、その後、減っていった、先生が余り、採用を抑制していた時代があった。そして今はどうなのかというと、採用が増えてきており、先生の質の問題や、先生の年齢バランスが崩れてきたりしている。その中でどのように教育力を付けていくかという問題など様々な問題がある。流入した人口はそういうものなのかと思う。子育て世代が流入して、次の世代に繋がらないということが問題だと思う。
- ・そこで、教育としてどう取り組めるのかと考えると、流山市の魅力を子どもたちに教える地域学習というか、流山市はいいところだという思いを持たせていく、本当にいいところにしなければならない、それが教育施設にもつながるし、幼稚園、保育園、小学校、中学校とそれぞれのところで魅力のあるものを作っていくということが重要である。安定した人口、ピラミッドを維持できるような施策が必要だと考える。

(委員)

- ・人口は流動している。人が集まりそこにマネーフローが生まれる。流動する人口を流山市の中で少し留め、そこでお金が落ちる。流動する人口と定住する人口と見方は2つあると考える。流山市を流動する人口が増えれば、流山市に流入する Money Flow も大きくなる。

(委員)

- ・雇用が最も重要と考える。1人1人の雇用の確保が人としての基本と考えている。流山市は商業工業が弱く、製造品出荷額や事業所数などの値も少ない。ベッドタウンとしては成功しているが、空き店舗問題や創業支援によって、引き続き小さくてもそういう事業所を増やしていく。大掛かりなこととしては、優良企業の工場などの企業誘致を行いたい考えもあるが、住宅地の流山市には中々適当な土地も無い。そのような中で、どのように雇用を生み出していくかについて考えていきたい。

(委員)

- ・先ほど合計特殊出生率1.5という話が出たが、人口を維持するために2.1には遠く及ばない状況である。目先の保育所整備や学童クラブの整備も必要であるが、根本として、若い人が将来ビジョンを描けるような社会をつくらなければ、中々結婚、出産という考えには及ばない。
- ・本市の場合、保育所を整備しても足りず、今年度も待機児童が約50人いる。それにもまして学童クラブが不足している。保育所からの児童、転入者、そして子どもが小学校に上がったので親が働く児童など、増加要因がある、このような状況であ

る。また、今年度は、空き店舗等を活用した定員数20人程度の小規模保育に力を入れていこうと考えている。

- ・シティセールスとして、「母になるなら流山市」、「学ぶ子にこたえる流山市」というコピーがあるが、現場では中々それに応えられていない状況である。
- ・また、保育士の確保が難しい面もあり、開園予定の保育園が1年先送りになった事例もある。

(委員)

- ・高齢者をいかに元気で社会に役立っていただけるかが重要である。空き家対策を含めた高齢者ふれあいの家事業を行っているが、まだまだ、仕事ができる高齢者がいる。高齢者の雇用という面では、高齢者の経験と活かすような場、そして高齢者の生きがいをつくれるような場をつくれれば良いと考える。
- ・個人的には、人口減少は就業世代の奪い合いである。いかに市の魅力、市のブランドイメージの醸成が、田園調布、ニコタマなど、戦略的なブランドイメージが高まれば、人が集まってくるのではないかと思う。

(委員)

- ・空き家対策特措法が施行される。そうなるといずれは土地が流動することが想定される。市としては、今後、空き家対策についても目を向けていきたい。

(委員)

- ・子育てとか、どこでも出てくるような言葉ではなく検討が必要である。
- ・また、他市との比較検討も必要ではないか。KPIの設定にあたっては、数値目標が作れるような政策である必要がある。

(委員)

- ・保育、教育の質向上のため、保育士の不足、今いる教員や保育士が専門性を高められる研修（スキルアップ）、成長を促す支援をする必要があるのではと感じる。

(委員)

- ・自然やみどりの活用はすでに実施していると思うが、これは住みやすさに繋がるので戦略の中でも活用するべきと考える。

(委員)

- ・高齢者にはいろんな分野で活躍してもらいたいと考えるのでシニア世代の意識改革が必要と考える。

(委員)

- ・女性の労働力、社会参加も加えた方が良いと思う。女性の社会参加、女性の労働が今後ますます重要になってくる。